新編金瓶梅 二集 上

馬琴作
豐國画

へ13
3724
2

門 へ 13 號 3724

和漢小説稗史の作者善悪邪正賢不肖動静云為山水景
致みづから先その苦楽を喫めて然して後に作るにあらざれ智慧ある者の
おのづから世を観て情に通じて知るといふ所なし知るといへども文なければ亦
情態を寫すに難し嗚呼談何ぞ容易ならんや故に張竹坡が金
瓶梅の讀法に金瓶梅は人をして是を誤るものにあらず人々みづから
是を誤る夫人は賊と説くものは原戒を示すなり然るを聴く者これに因て
遂に賊と倣ふといへり説くものは過を聴くものはみづから賊と倣ふものなり
云云とあんいへりける此批語宜に説得て好し譬ば提婆達多は悪なり
原是世尊の説く所世尊提婆の悪を倣て言に初てその情に通
ずその義を説なりんや歌人は居ながら名所を知る歌人必その地を踏で
初て名所を知るにあらず一事を推て萬理に渉らば寓言も亦勧懲の
捷径にしてよんどころなきわざ中にも物の本は作者々々と渾山さらに
人の人を見て其いふ遣首では源語那首では水滸和漢今昔抜萃
彼の人の本の一番より畢ゆゑ人に知られし籍は又只花見風
情と秘にあらずなればこそ五百も亦數も漏しぬ自然荒唐果敢なき
ける中に大象は遊びの兒園の冊子合巻物の悲しき何書う
わが帯ならし情態只景致ひとつとして寫すを足らぬ見戯の本に弥敢に
備りても九尺店では使れぬ二間の鉢梅金瓶梅高き書名を假に初よ
著せしより既にこれ今茲は二編と接木の室咲間に笑ふる間もあらばこそ
だらく急案一夕蘖根も名言をあり貞は枝葉を麁鹿て香ひ匂ふ花の
大江戸の名物とのでもあらぬ菓子れ亭と亦草稿も世に筆に信じ紅

天保三年壬辰春正月吉日刊鏤　曲亭馬琴識

武太郎之妻落葉
楠一味齋正忠

西門屋安力野
西門屋の女房
卓二

西門屋啓十郎
不詣
室の山より
深ぶかの雲を立
べのりける
西門屋の
新婦
呉絽服

水の面をやどさる
月を かくせり
うき雲
喜田意菴
舞妓外藻

四橋
綿しの

琵琶法師
いにしへの琴の音
杖のたもとを
通りそぐらむ

藪代の
岡邊

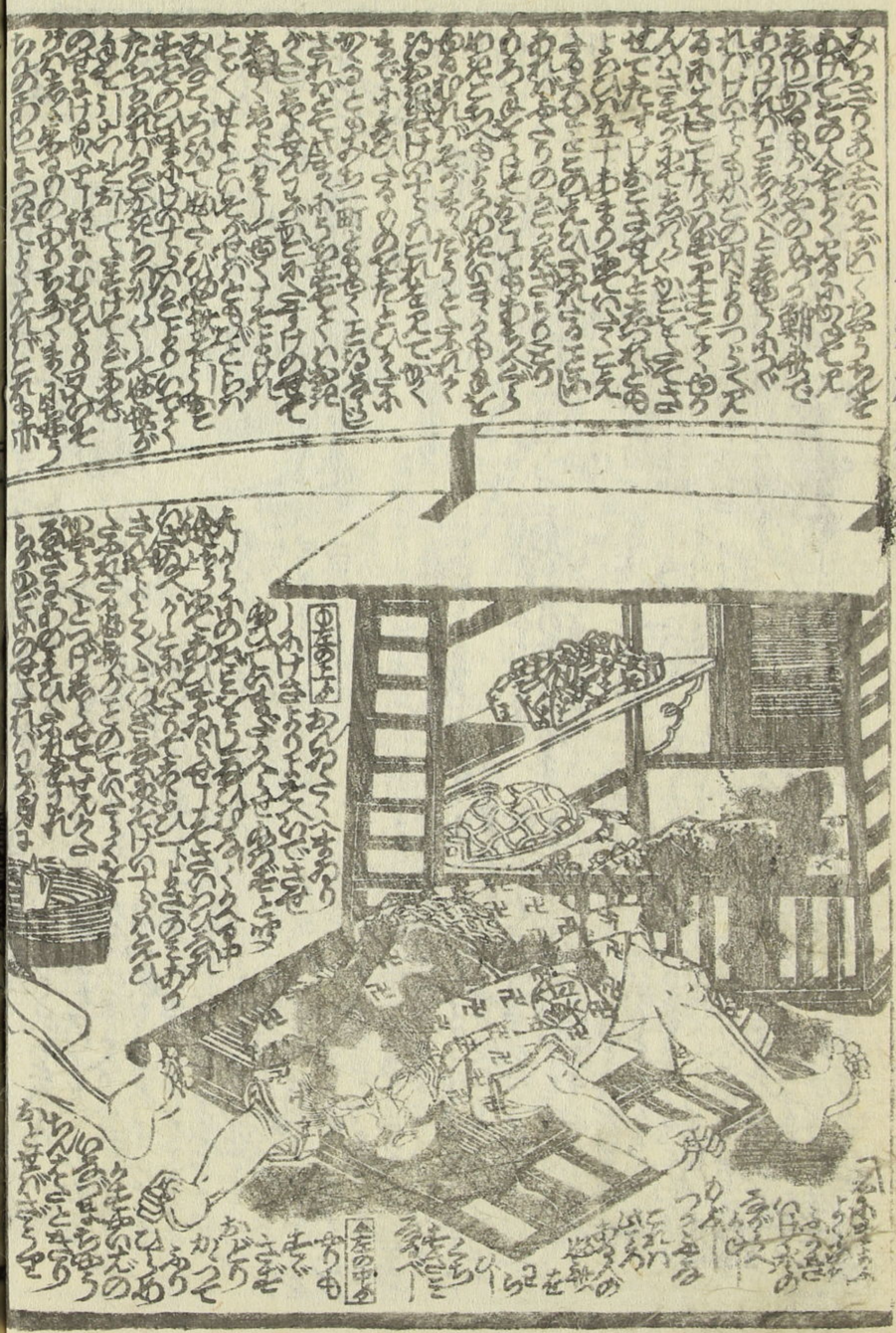
あづまのゆきち
吾嬬空八
とうぎれ
敵よ
金よ
やと
戈
鉤
たち
身若
加え
錢

藻塚朝齋

楠
松
山
川

安
松
山
川

南
安
松



新編金瓶梅十集　曲亭馬琴作　一陽齋豊國画

女郎花五色石臺　初編　曲亭馬琴作　四冊　一陽齋豊國画

児雷也豪傑譚七篇　美圖垣笑顔作　一陽齋豊國画

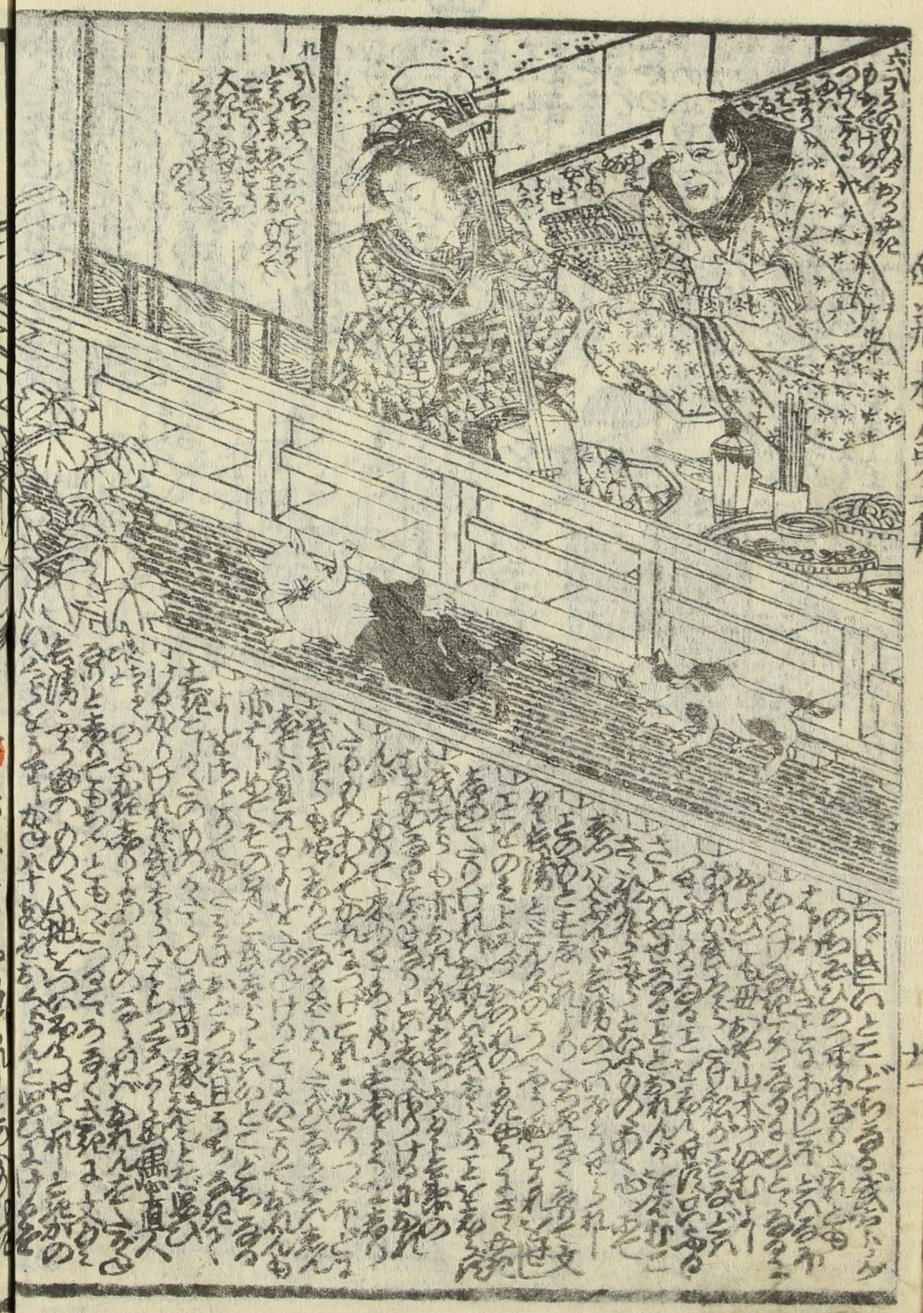
菊花壇養種　初篇全一冊

新編金瓶梅第二集下帙

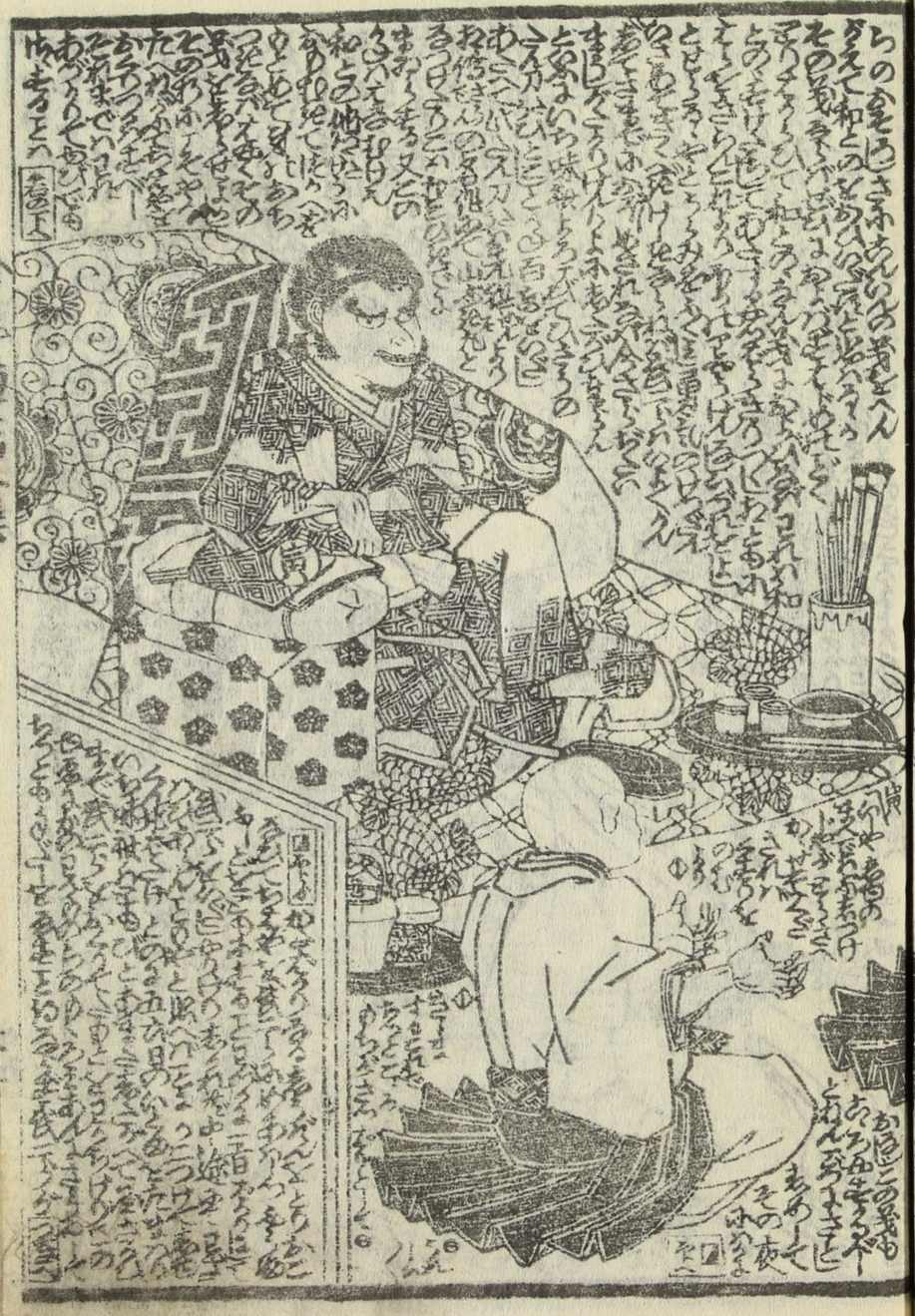
擬へ〻ん屋本傳の西門呉服の呉月娘力児卓二郎
木子婚児卓二姐喜田意菴ハ應伯爵祝屋念
三ハ祝賀念その名を擬〻く脚色と借らゐ作者の
腰より生山也武太ゞ女児の琴柱ハ迎児阿蓮〻
勿論潘金蓮を寫更〻高新作新編かゝ
趣向の繪策子を和と漢を合巻乃榮

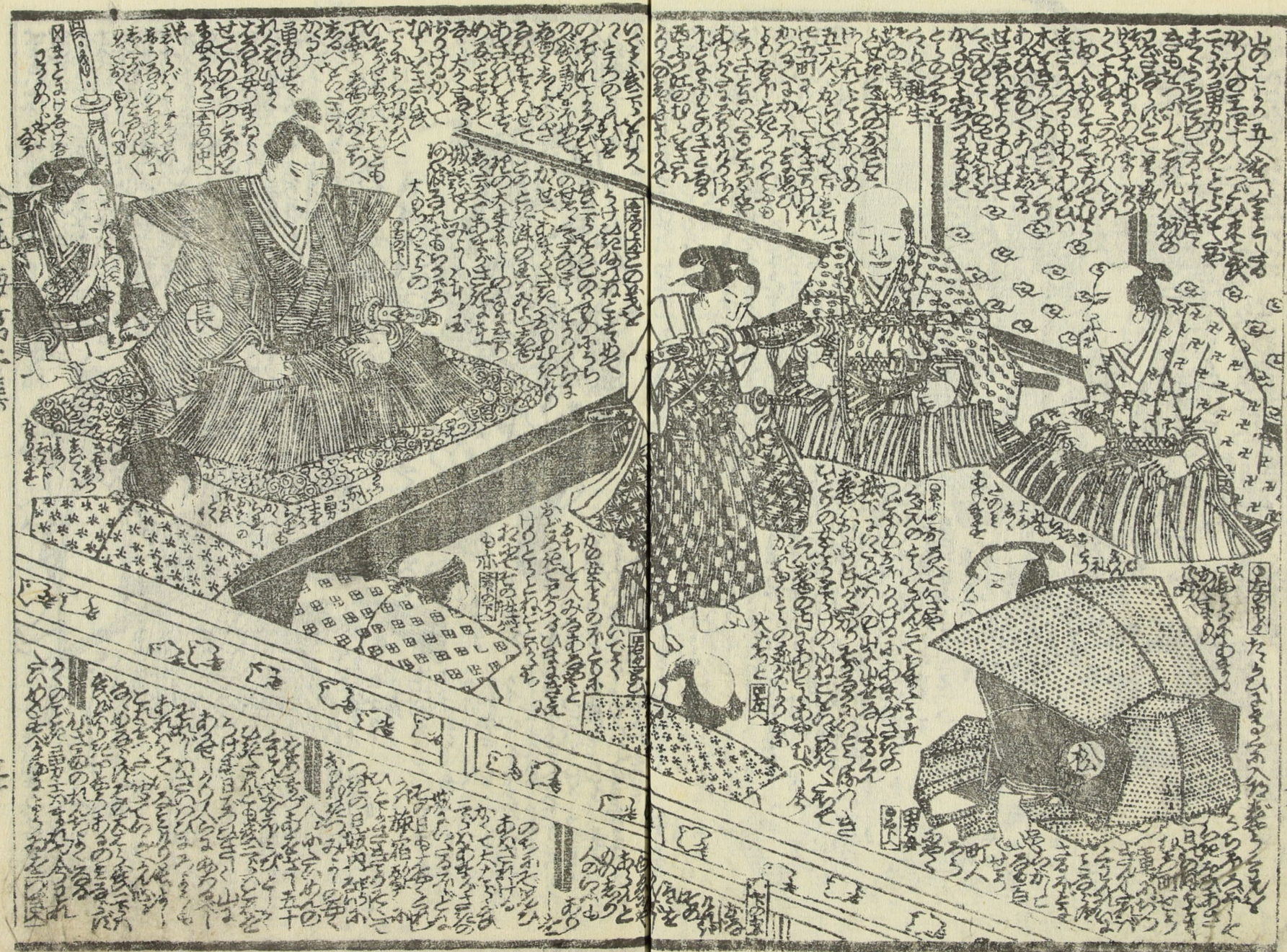
馬琴作
國安画

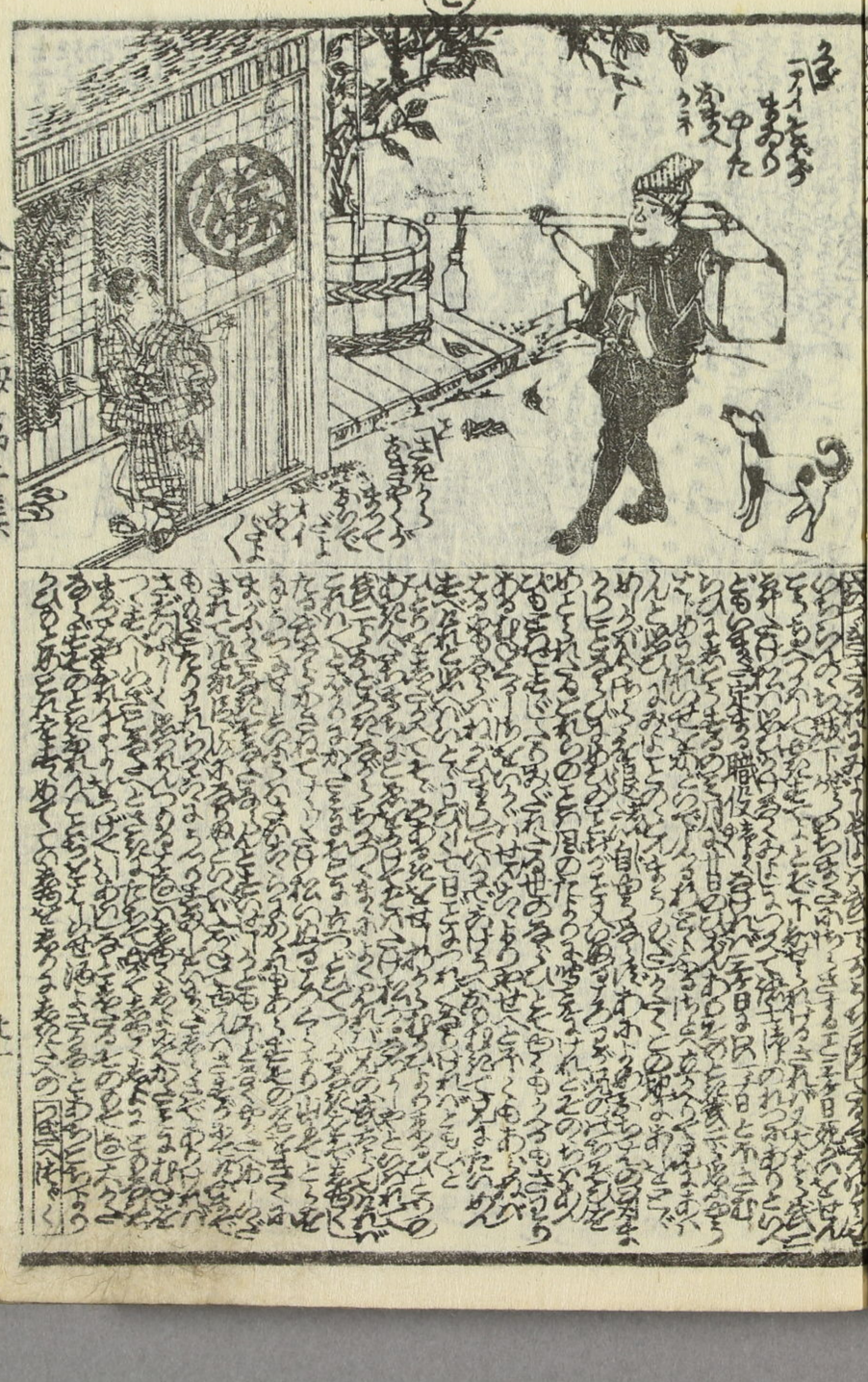
江戸芝神明前三嶋町地本問丸
甘泉堂和泉屋市兵衛精刊

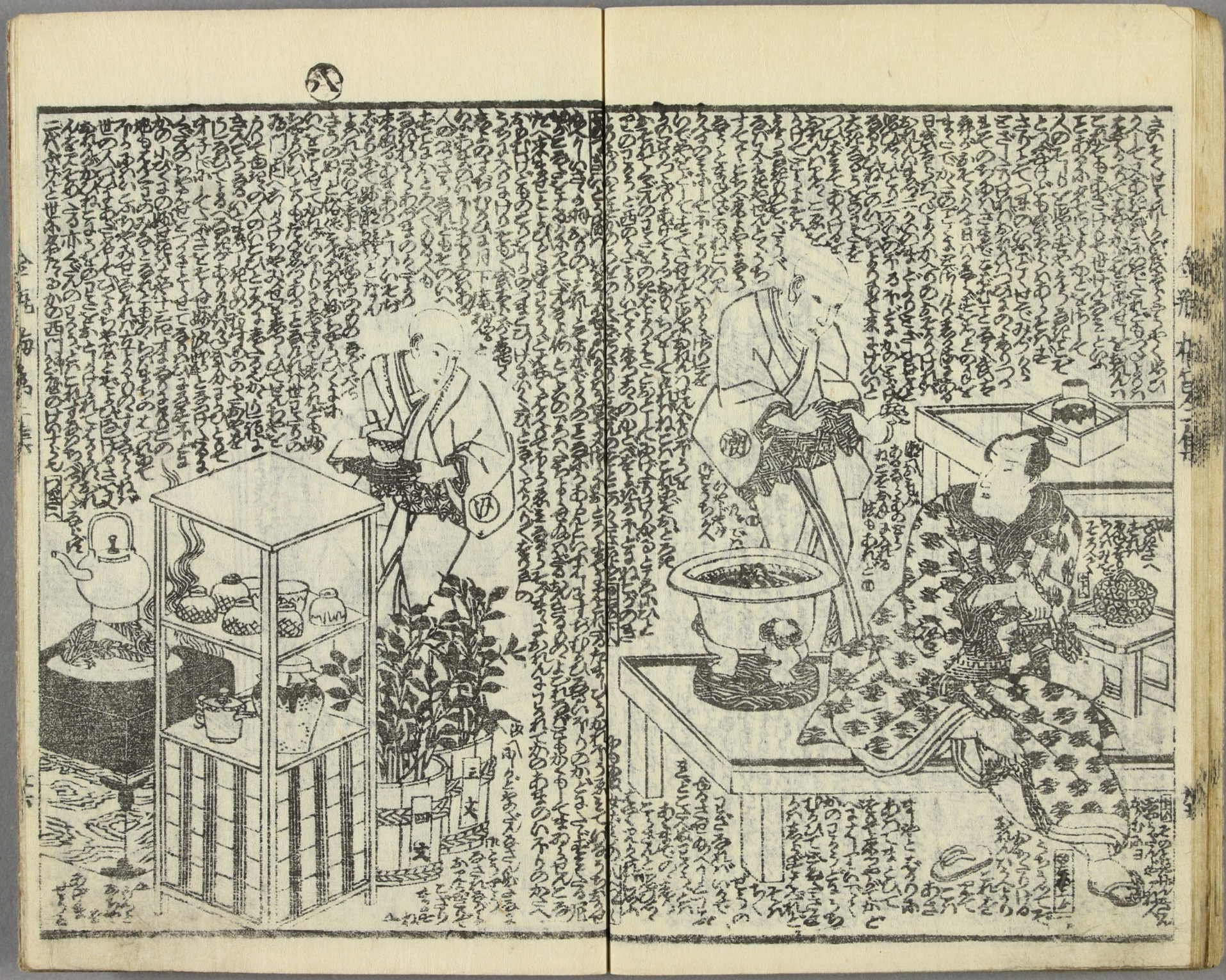


富貴剣價脱分五平生一




松
長





湖月百人一首撰庫

源氏絵尽
女今川入

繪本名頭武者部類　前北斎筆　全

源氏絵尽　中本　全

源氏百人一首小倉錦

蘭山先生著

女用玉箒

大本一冊

女は男に笑ひ合ひて物の恥やうなるを笑ひとするのわが家にうれしきうれしきはかりなるを笑ひとするのわが家にうれしきうれしきはかりなるを笑ひとするのわが家にうれしきうれしきはかり